

# 唯一の専門紙 15周年

不登校やひきこもりをテーマにする国内唯一の専門紙「Fonte(フォンテ)」が今月、創刊15周年を迎えた。発行するNPO法人「全国不登校新聞社(東京都北区)」は編集部員のほとんどが不登校経験者。「当事者目線」にこだわった内容で廃刊の危機も乗り越え、不登校の子どもや親らの心の支えとなっている。

【藤沢美由紀】

「『頑張れ』はやっぱ辛い」「『頑張ったね』って言ってほしかった」

5月中旬の日曜。編集会議で部員約10人が意見を話し合う。テーマは「言われたくなかった言葉、言われたかった言葉」。「マニュアルとして使われないよう載せ方を工夫しよう」。2006年から編集長の石井志昂さん(31)がアドバイスする。

同紙は「不登校新聞」として1998年創刊。前年に不登校を苦しめた中学生による自殺や放火事件が相次ぎ、「不登校でも生きていけることを

# 不登校でも生きる



伝えたい」との声が上がったのがきっかけだった。04年にラテン語で「源流から」を意味するフォンテに改名後も「当事者の声を発信する」という基本方針で月2回の発行を続ける。

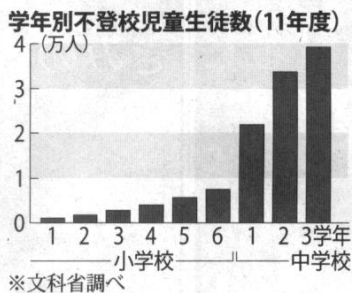
常勤職員の3人と共に取材執筆を担当するのは不登校や引きこもりを経験した10代

和やかな雰囲気です。次号の企画を話し合う石井編集長(右から2人目)と編集部のメンバー——東京都北区で19日

後半は20代のボランティア。全国で34人が登録し読者の9割を占める不登校児童・生徒の保護者の「子どもの気持ちを知りたい」という要望に込めている。

5年前から参加する成城大学院2年の大井信矢さん(24)も小中学校時代、不登校

# 経験者の目で「当事者の声」発信



## ネット依存も一因に

の経験を持つ。「ここには一緒に考えられる仲間がいた。石井さんも不登校で「生きる資格がない」と思い詰めたが、16歳の時、創刊号の取材を受けたことがきっかけで部員になった。自身の体験から「生き延びることが大切」ということを伝えたい」と強調する。

フォンテの部数は創刊時には約6000部だったが昨年春には800部に。一時は存続も危ぶまれたが、ひきこもり経験者による手記や孫の不登校に悩む祖父母に向けたコラム

近年は「親同士がつながりたい」という要望が多く、6月からは地方を中心に「読者オフ会」も開く予定。石井さんは「当事者の気持ちの発信量は足りていない。子どもや親のニーズに応えたい」。タプロイド判8ヶ月8000円。申し込みは東京編集局(03・5963・5526)まで。ホームページのURLはhttp://www.futoko.org/

文部科学省によると全国の不登校の小中学生数は11万7458人(2011年度)。01年度の13万8722人をピークに減少傾向にはあるものの、割合はほぼ横ばいだ。

スクールカウンセラーの配置が進み、東京都のチャレンジスクールや大阪府のクリエイティブスクールなどがあるものの、割合はほぼ横ばいだ。

スクールのカウンセラーの配置が進み、東京都のチャレンジスクールや大阪府のクリエイティブスクールなどがあるものの、割合はほぼ横ばいだ。

イティブスクールなど昼間も学べる定時制高校も各地に誕生。不登校の子どもを取り巻く環境は改善されているように見えるが、専門家によればインターネットやスマートフォン(多機能携帯電話)の普及でネット依存症に陥り、小学校低学年から不登校となるなど新たな課題も浮かんできている。

いじめや不登校などの問題に詳しい兵庫県立大の竹内和雄准教授は「不登校の問題を解決するには教師や保護者が子どもの本音をしっかりと聞き、不登校の原因を取り除く努力をすべきだ」と指摘している。